

# 唐招提寺本金光明最勝王經古点と

## 西大寺本金光明最勝王經古点

宇 都 宮 睦 男

「金光明最勝王經」の古点本には、唐招提寺本、西大寺本、石山寺本などがある。石山寺本は未紹介であるが、西大寺本十卷は、春日政治博士の大著「西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究」によって、広く世に知られている。また、唐招提寺本は、稲垣瑞穂氏が「訓点語と訓点資料」第一輯に、その解説と解説文を公にされた。稲垣氏の解説によると、唐招提寺本は、卷二・五・六（甲・乙二本）の零本で、そのうち卷六（乙）白点本は他の三本より遙かに古い訓点を伝えている上に、点の剝落も少く、全文の解説がほぼ可能のようである。従って、同氏の解説文も卷六（乙）本について成されており、同時にこれには春日氏の西大寺本との対校が示してある（以下、唐招提寺本を唐本、西大寺本を西本と略称する。）

さて、唐・西両本ともに、識語を欠いているために、加点半次は不明であるが、諸種の点から判断して共に平安初期点であろうといわれている。しかし、その上、更に両点を比較してその新古を問題にすることは、あまりなされていない（遠藤嘉基博士「西大寺本金光明最勝王經古点と唐招提寺本金光明最勝王經古点について」八「斯

道文庫報」十九・二十合併号Vがあるが未見である）。そこで、私は、この問題について考えてみる。方法としては両点で、訓読上相違のある全ての例を取りあげて、それを漢文訓読史の観点から眺めてみようと思う。

### 一 分 類

まず、稲垣氏の解説文と西本のそれとの対校をもとにして、本文上、両点で異同のある全ての箇所を取り出して分類整理すると次のようになる。（用字中、傍線部に相当する西本の訓読は各用例の終りに（ ）で示した。）

#### 第一項 助字の訓法

- 一 二資料で訓法を異にするもの
- 1 助字を不読にするか否かの相違

(1) 唐本が不読にして下に語添えるところを西本は直接読む。

#### (7例)

〔底〕 当に此の經王を供養シタテマツルベシ（70）（西、す底

し)

(2) 唐本が直接読むところを、西本は不読にして下に読添える。

(1例)

諍訟するコト有るコト無ク(あら)令(め)たまふに(63)

(西、〔令〕——有(る)こと無(から)シメ)

2 訓そのものの相違

(1) 唐本が古い訓のところを、西本は新しい訓で読む。(22例)

仏身は光り曜(け)るコト金山の等し(72) (西、に等(し)ク)

二 二資料で訓法を同じくするもの

1 振り仮名相当の訓

〔I〕実字訓の有無

(1) 唐本が実字訓のところを、西本は訓なし(1例)

常に心を護(り)て嗔恚せ令(む)るコト勿(る)可(し)。

(69) (西、无ナシ)

〔I〕実字訓か仮名訓か

(1) 唐本が実字訓のところを、西本は仮名訓とする。(1例)

齒は白ク密クして珂と雪との麤(し) (72) (西、ゴトシ)

〔II〕仮名訓の有無

(1) 唐本が仮名訓のところを、西本は訓なし(2例)

当に独り淨室に処し香を焼(き)て〔而〕臥る須(し)ン(68) (西、ベナジ)

(2) 唐本が仮名訓のないところを、西本はあり。(2例)

善哉 甚希有なりと称歎シタマフ(74) (西、ナアリ)

2 送り仮名相当の訓

〔I〕仮名点かヲコト点か。

(1) 唐本が仮名点のところを、西本はヲコト点とする。(10例)

神呪を誦す可シ(66) (西、可し)

(2) 唐本がヲコト点のところを、西本は仮名点とする。(13例)

世間に有所る法式(64) (西、ル)

〔II〕付訓の有無

(1) 唐本に付訓あるところを、西本は付訓なし。(18例)

我レ即ち身を変て(70) (西、チナシ)

(2) 唐本に付訓なきところを、西本は付訓あり。(9例)

是等の如(き)不可思議の(65) (西、キ)

第二項 読添語

一 二資料で訓法を異にするもの

〔I〕読添語の有無

(1) 唐本には読添語があるが、西本では欠くもの。(85例)

イ 助詞ノ・ニ・テ・ハ・ヲ・ト・モチテ(37例)

相好は空の如し(73) (西、ナシ)

ロ 助動詞シム・ム・ル・ベシ・ナリ・ヌ(28例)

自ラ其の数を<sup>ル</sup>知るベシ(68) (西、レ)

ハ 形式名詞コト・トキ・ヒト(5例)

我が自身現するコトを見(ること) (69) (西、ナシ)

ニ 形式動詞ス・アリ(7例)

即ち慈愛シ、欲喜する〔底〕心を生(き)む(70) (西、シナシ)

ホ 敬語の形式動詞タマフ・タテマツル(8例)

賊盜無クアラシメタマフ(73) (西、を無から使む)

(2) 唐本には読添語を欠くが、西本にはあるもの(77例)

イ 助詞ノ・ニ・テ・ハ・ヲ・ト・シテ・ニオイテ・イ(48例)

童子形に現して (67) (西、の、アリ)

ロ 助動詞ム・ナリ・シム・ベシ・リ・ヌ・ツ・ケリ・タリ (22例)

此の呪を誦する〔え〕人を見 (70) (西、(セ)む)

ハ 形式名詞コト (1例)

是(の)如ク盛に供養(を)興サムを見ては (70) (西、する)

ことを興(さ)む

ニ 形式動詞ス (1例)

同右ハ

ホ 敬語の形式動詞タマフ・タテマツル・イマス (5例)

仏の功德を讃ラク (72) (西、讃(し) たてまつラク)

〔I〕 読添語の異同 (70例)

イ 助詞 (47例)

長遠にて无量蔵を経シメム (69) (西、にして)

ロ 助動詞 (10例)

有る本に云ク、日毎に一百の陳那羅を与フベシトイフ (68)

(西、与へむトイヘリ)

ハ 形式名詞 (4例)

前の所説に比するトキは彼れの勝れ(たる)コト (63) (西、

に)

ニ 形式動詞 (6例)

威ク法の如クせ令メヨ (70) (西、あら)

ホ 敬語の形式動詞 (3例)

五通の仙に勝(れ)たまふコト (64) (西、勝(り) たること)

二 二資料で訓法を同じくするもの

〔I〕 仮名点かヲコト点か

(1) 唐本が仮名点のところを、西本はヲコト点とする。 (85例)

イ 助詞ヲ・バ・ニ・ガ・テ・シテ・マデ (12例)

乃至尽ル形マデニ日に常に得む (68) (西、尽形マデに)

ロ 助動詞ム・ナリ・キ・リ・ムトス (22例)

寿命長遠ナルコトと (70) (西、なることと)

ハ 形式名詞コト (29例)

虚誑は有るコト无シ (72) (西、(る) こと)

ニ 形式動詞ス・アリ・イフ (10例)

恭敬を現シ口には佛名を称せむ (70) (西、し)

ホ 敬語の形式動詞タマフ・タテマツル・マラス (12例)

請召シタテマツルトマヨサム (68) (西、したてまつる)

(2) 唐本がヲコト点のところを、西本は仮名点とする。 (24例)

イ 助詞ヲ・ヨリ・マデ・モチテ (12例)

大威徳を獲シメ (64) (西、ヲ)

ロ 助動詞リ (2例)

〔於〕千の月の光明放てるに途(え)たり (73) (西、(て

ル)

ハ 形式動詞ス (10例)

隨善せ令(む)るコト勿る可(し) (69) (西、セ)

〔I〕 付訓の有無

(1) 唐本には付訓あるところを、西本は付訓なし。 (59例)

イ 助詞ニ・ト・ノ・ハ (8例)

時に四天主、俱に〔從〕座より起(ち) (72) (西、(に) )

ロ 助動詞シム・ナリ・ラル (11例)

功德无量ナラム (66) (西、(な) ラむ)

ハ 形式動詞ス・アリ (40例)

受持せむと欲はむ者は (66) (西、(せ))

(2) 唐本に付訓なきところを、西本は付訓あり。 (33例)

イ 助詞ノ・ニ・ヲ・ハ・テ・ト・バ (20例)

是(の) 経王を流布せむ者 (65) (西、の)

ロ 助動詞ム・ラル・タリ (3例)

讚歎(せむ) を見ては「者」 (65) (西、(せ)むを)

ハ 形式名詞コト (1例)

見(ること) 得むと欲は者 (69) (西、ルこと)

ニ 形式動詞ス (9例)

当に擁護(し)て其の衰患を除す応(し) (65) (西、して)

第三項 詞訓字

一 二資料で訓法を異にするもの

1 和語か字音語か

(1) 唐本が和語のところを、西本は字音語とする。 (34例)

イ 名詞 (22例) ②③④ ⑥ 11例)

① 金の錢 ↓ 金錢 (68)

② 軽き心 ↓ 軽心 (70)

③ 求むる所 ↓ 所求 (70)

④ 寿と命 ↓ 壽命 (69)

ロ 動詞 (13例)

演べ説ク ↓ 演説ス (64)

(2) 唐本が字音語のところを、西本は和語とする。 (33例)

イ 名詞 (26例) ②③ ⑥ 5例)

① 仏面 ↓ 仏の面 (72)

② 静室 ↓ 静(な)ラむ室 (66)

③ 所乏 ↓ 乏(し)キ所 (74)

ロ 動詞 (7例)

莊嚴ス ↓ 莊リ飾フ (69)

2 和訓の有無

(1) 唐本に和訓あるところを、西本はなし。 (1例)

然りして後に「於」浄室の中にみ單摩をもちて地に塗し小ナ壇場を作レ (67) (西、み・クナシ)

3 和訓の異同

イ 副詞 (1例)

我レ今具(シヤク) 是(の)如き「之」事を説ク (71例) (西、シバラ)

ロ 形容詞 (1例)

汝ち「可」速ク去日々に彼に二百の迦利沙撃を与(ふ)ベシ (68) (西、に)

ハ 動詞 (7例)

悉ク心に從(シカガユル) が如クは (71) (西、從フルが)

二 二資料で訓法を同じくするもの

1 振り仮名相当の訓

【】実字訓の有無

(1) 唐本が実字訓のところを、西本は訓なし。 (11例)

諸の樂具を生ず(或)が如ク (74) (西、成ナシ)

(2) 唐本に実字訓なきところを、西本は実字訓あり。 (1例)

仏の上に散(く) (75) (西、所也トアリ)

【】実字訓か仮名訓か

(1) 唐本が実字訓のところを、西本は仮名訓とする。 (4例)

拳ク身の戦動ク (75) (西、(こと)ゴト)

〔Ⅱ〕仮名訓の有無

(1) 唐本が仮名訓のところを、西本は訓なし。(6例)

仏形像を畫ベシ (69) (西、畫ケ)

2 送り仮名相当の訓

〔Ⅰ〕仮名点かヲコト点か。

(1) 唐本が仮名点のところを、西本はヲコト点とする。(3例)

心に悲喜喜(ぶ)るコトを (75) (西、び)

(2) 唐本がヲコト点のところを、西本は仮名点とする。(18例)

佛面は猶シ淨き満月の如シ (72) (西、キ)

〔Ⅱ〕付訓の有無

(1) 唐本に付訓あるところを、西本は付訓なし。(24例)

イ 代名詞 (7例)

我レ即ち身を變て (70) (西、レナシ)

ロ 形式名詞 (2例)

佛(に)曰(して)言ク (75) (西、ナシ)

ハ 動詞 (10例)

斯の人を護ラむ (75) (西、(ら) )

ニ 副詞 (5例)

若シ物の直に准(へ)ば (68) (西、ナシ)

(2) 唐本に付訓なきところを、西本は付訓あり。(31例)

イ 代名詞 (3例)

我常に權護(し)て (66) (西、我レ)

ロ 動詞 (23例)

喩と為(す)可(く)あ(ら)不(68) (西、す)

ハ 形容詞 (1例)

永(く)三塗を離レ常に災厄無クアラシメム (69) (西、ク)

ニ 副詞 (4例)

悉(く)皆遠去せシメ (68) (西、ク)

第四項 副詞の呼応語

一 二資料で訓法を異にするもの

1 「云ク」などの呼応語の有無

(1) 唐本に呼応語のあるところを、西本なし。(1例)

妙伽他以て仏の功德を讃ラク「仏面は猶シ—故に我レ心無者を稽首シタテマツル」(と)マラス (73) (西、首を心無着に稽(し)たてまつる)

(2) 唐本に呼応語なきところを、西本はあり。(2例)

持呪の者に語(り)て曰サク、「汝求むる所に随いて—唯佛のみ証知シタマヘ」(72) (西、(し)たまへラむ)トマラス)

2 「云ク」の呼応語の異同

(1) 唐本と西本とで呼応語の異なるもの (4例)

世尊、亦伽他を以て「而」答(へて)「之」曰ク、「此の金光明最勝王経は—益せ令タマフ」トイフ。(75) (西、令(め)てむ)とのたまふ)

二 二資料で訓法を同じくするもの

1 「云ク」の呼応語「トイフ・トマラス」

〔Ⅰ〕仮名点かヲコト点か

(1) 唐本が仮名点のところを、西本はヲコト点とする。(3例)

其父報て曰ク、「汝ち〔可〕速ク去日日に彼に一百の迦利沙撃を与(ふ)ベシ」トイハム (68) (西、といはむ)

第五項 対句の訓法

1 終止形か中止形か

(1) 唐本が終止形にするところを、西本は中止形とする。(8例)  
於佛<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>辺<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>吉祥<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>像<sup>ヲ</sup>。於佛<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>辺<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>門<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>像<sup>ヲ</sup>。  
(69) (西、リ)

第六項 訓法そのものの相違

1 終止形か中止形か

(1) 唐本が終止形のところを、西本は中止形とする。(6例)  
布<sup>ニ</sup>烈<sup>ニ</sup>華<sup>ニ</sup>彩<sup>ニ</sup>一<sup>ヲ</sup>燒<sup>ク</sup>衆<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>香<sup>ヲ</sup>。燃<sup>レ</sup>燈<sup>ヲ</sup>統<sup>テ</sup>明<sup>ク</sup>昼<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>無<sup>ク</sup>歇<sup>ス</sup>。(70) (西、キ)

(2) 唐本が中止形のところを、西本は終止形とする。(3例)  
乃至<sup>レ</sup>尺<sup>ノ</sup>形<sup>ニ</sup>我<sup>レ</sup>当<sup>レ</sup>擁<sup>レ</sup>護<sup>ス</sup>。隨<sup>テ</sup>逐<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>除<sup>ク</sup>災<sup>ノ</sup>厄<sup>ヲ</sup>。  
(71) (西、ケむ)

2 原文の構造に合致した訓法か否か

(1) 唐本が原文の構造を無視して意識的和文的訓法をしているところを、西本は構造に合致した訓法をしている。(12例)

(唐) 是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>各<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>國<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>。当<sup>レ</sup>燃<sup>ク</sup>法<sup>ノ</sup>炬<sup>ヲ</sup>。明<sup>ク</sup>照<sup>ス</sup>無<sup>ク</sup>邊<sup>ノ</sup>一<sup>ヲ</sup>。増<sup>ス</sup>益<sup>ス</sup>。天<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>并<sup>テ</sup>諸<sup>ノ</sup>眷<sup>ノ</sup>屬<sup>ヲ</sup>。(63)

(西) 是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>各<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>國<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>。當<sup>レ</sup>燃<sup>ク</sup>法<sup>ノ</sup>炬<sup>ヲ</sup>。明<sup>ク</sup>照<sup>ス</sup>無<sup>ク</sup>邊<sup>ノ</sup>一<sup>ヲ</sup>。増<sup>ス</sup>益<sup>ス</sup>。天<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>并<sup>テ</sup>諸<sup>ノ</sup>眷<sup>ノ</sup>屬<sup>ヲ</sup>。

(唐) 無<sup>ク</sup>視<sup>ス</sup>し意識<sup>的</sup>和<sup>文</sup>的<sup>訓</sup>法<sup>を</sup>して<sup>い</sup>る<sup>もの</sup>。(13例)

(唐) 作<sup>リ</sup>是<sup>レ</sup>殊<sup>ニ</sup>勝<sup>ニ</sup>供<sup>ニ</sup>養<sup>ヲ</sup>。佛<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>。佛<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>。

(西) 作<sup>リ</sup>是<sup>レ</sup>殊<sup>ニ</sup>勝<sup>ニ</sup>供<sup>ニ</sup>養<sup>ヲ</sup>。佛<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>。佛<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>。

(西) 作<sup>リ</sup>是<sup>レ</sup>殊<sup>ニ</sup>勝<sup>ニ</sup>供<sup>ニ</sup>養<sup>ヲ</sup>。佛<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>。佛<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>。

二 分類に基づく考察

さて、以上の分類をもとにして両点の新古を判定する場合に、その基準として有力な手掛りとなるものは、小林芳規先生の御論「漢文訓読史上の一試論」(国語学55)である。これは、同一漢文を持つ「玄奘法師表啓平安初期点」と「三藏法師依永久点」とを比較対照することによって、訓読語の変遷を踏づけられた訓読史論である。ところで、これを本調査に適用しようとする場合に、問題になる点は、この御論は平安初期点と中期点との比較によってなされているのに対して、本調査の場合は共に平安初期点であるということである。しかし、このような訓読の変遷は初期と中期を境として突然に現われたものではなく、既に平安初期に於ても目立たないながら、一つの流れとして存在していたであろうと考えられるので、この考えの上に立って、以下考察して行くことにする。

1 助字の訓法

まず、第一項の「助字の訓法」では、小林先生は、新古の基準として次の点をあげられるが、今、それを要約して記す。

基準一 平安初期点で不説の助字が、永久点では一定訓を持つ。

基準二 平安初期点では辞の訓であるが、永久点では詞の訓を持つ。

これは、平安初期点では、助字を含む原漢文を個性的且つ日本語として自然な文章に近づけて訓読するので、同一助字を含む漢文も個性的に種々の異った助詞・助動詞などの説添語が考察されるが、中期では助字に一定の訓を固着させようとする傾向が見られることによると説かれる。

そこで、基準一が適用できる項目を見ると、それは「助字を不読にするか否かの相違」である。そのうち「唐本が不読にして下に読添えるところを、西本は直接読む」ものは7例あるのに対して、その逆の「唐本が直接読むところを、西本は不読にして下に読添える」ものは一例に過ぎないことは、唐本の訓読の古いことを表わしている。例にあげた以外の例として次のものがある。(「ハ」はその中の助字が不読であることを示している。)

1 汝ち〔可〕速ク去日日に彼に一百の迦利沙拏を与〔ふ〕ベシ  
(68) (西、フ可シ)

2 〔令〕彼の衆生を〔し〕て苦を離レ樂を得て能ク福智二種の資糧を成ラシメム(66) (西、令(め)む)

3 〔於〕此の経王を広(め)宣(し)流布(し)て(65) (西、此の経王に於て)

次に、基準二が適用できる項目は、「訓そのものの相違」の「唐本が古い訓のところを西本は新しい訓で読む」である。例にあげたものがそうであるが、この「等」の読みに関しては、大坪併治博士「訓点語で『等』をゴトシと読む場合」(訓点語の研究二四九頁)があつて、必ずしも「ゴトシ」と読む場合が中期に無かつたわけではないが、それは一種の付属辞としての読みであつて、普通は形容詞として「ヒトシ」と読むのである。

以上は基準に照らして唐本が古いと見られる例であるが、その他に次のような例も唐本が古いことを表わしている。「等」の例と同項に属する次の如きものである。

1 称計す可ク(あら)不(ある)をも(64) (西、可(から)ず〔不〕して)

2 賊盜無クアラシメタマフ(73) (西、を無カラ使む)

## 2 読添語

次に、第二項の「読添語」では、次のような基準がある。

基準三 平安初期点では読添語があるが、同箇所の漢文に永久点ではその読添語を欠くもの。

基準四 平安初期点で用いた諸種の類義語の意味を、永久点では捨象して特定語に代用させて用いるもの。例えば、平安初期点の「ドモ・トモ・バ」「キ・タリ」「ツ・ム」を、永久点では夫々「テ」「リ」「タリ」とするなど。

これは、訓読文が時代が下るにつれて読添語の個々の微妙な意味の差を捨てて、抽象的な情意性の乏しい文章となるので、平安初期の種々の読添語はその種類と量を減少することによると説かれている。

そこで、基準三が適用できる項目を見ると、それは「二資料で訓法を異にするもの」に於ける「読添語の有無」である。そのうち「唐本には読添語があるが、西本では欠くもの」が85例あるのに対して、逆に「唐本には読添語を欠くが、西本にはあるもの」が77例で、唐本の方が読添語の数が多いのであるが、更に、添意性が強い助動詞から敬語の形式動詞までに限って比較すると、49対30で唐本の方が明らかに読添語が多い。中でも形式名詞と形式動詞に於て顕著である。その例は、前掲以外に次のものがある。

1 其の像を画(か)ムトキ人に八戒を受ケ為ヨ(69) (西、ナシ)

2 受持するコト有(る)ヒトを見(74) (西、こと有ルを)

3 不至心アラムヒトヲバ除ケ(也)(68) (西、不至心をば)

4 復無量諸仏に値遇シタテマツルコト得て (64) (西、するごと)

△ 大慈悲を以て (64) (西、いまずを)

以上から唐本が比較的古い訓読を表わしていると考えられる。

次に、基準四については「読添語の異同」の項が該当するが、その多くの例は、

1 常に瞻部洲を流通するコト得 (73) (西、に)

2 彼れの勝れ (たる) コト百千俱胝那頤多倍にして (63) (西、彼しに勝 (り) たること)

などのように、「流通ス」を他動詞と見るか自動詞と見るかの相違とか、2のように、「彼レ」を主格と見るか連用修飾格と見るかの相違のように、主として「訓法の相違」に基づくものであって、基準の意味する相違とは性格が異なる。しかし、この基準を別にして同じく「読添語の異同」に属する次のような例は、西本の読添語が訓読特有語又は未融合形であるのに対して、唐本のは和文にも見られる語又は融合形である点で、唐本の方が古形と見られるものである。

1 長遠にて無量感を経シメム (69) (西、にして)

2 富樂を得令 (め) むとて是の神呪を説き (72) (西として)

3 相ヒ侵するコト擾 (せ) 使 (む) るコト勿くて、彼の身心を寂靜安樂にアレ令メヨ (65) (侵擾セ使むルこと勿 (く) して)

4 諸の衆生の為に是 (の) 如き微妙の經典を演べ説 (き) てなり (64) (西、演説 (し) たまふをモチテなり)

5 神通自在にアラシメム (69) (西、(な) ラむ)

以上の他に、「仮名点かヲコト点か」の項で、「唐本が仮名点の

ところを、西本はヲコト点とする」ものが85例で、逆に「唐本がヲコト点のところを、西本は仮名点とする」ものが24例で、唐本の方が仮名点の場合が多いことがあげられる。つまり、一般に点本は古いものほど仮名点が多いのに対して新しいものは、逆にヲコト点が多いからである。(春日博士「西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究」)。

### 3 詞訓字

次に、第三項の「詞訓字」では次のような基準がある。

基準五 平安初期点の和訓の字を永久点では字音とする。

基準六 平安初期点の和訓と別の平易な和訓とする。

これは、原漢文中の一漢字に詞の訓が与えられる際に、その漢字の訓として可能な諸訓または音の中から、選択に劣しないその漢字の訓として一般的な特定訓が採られる傾向が、時代が下るにつれて多くなることによると説かれている。

まず、基準五が適用できる項目を見ると、それは「和語か字音語か」の項である。そのうち「唐本が和語のところを、西本は字音語とする」ものが34例で、逆に「唐本が字音語のところを、西本は和語とする」ものが33例で、一見相違が見られない。しかし、西本には「ノ」からなる和語(「金ノ錢」など)が大部分で(西本の和語26例中21例)、これは和語としての性格が非常に弱く、寧ろ準和語ともいふべきである。従って、これを除くと24対12で、唐本の方が和語は多くなる。前掲の他に、唐本の和語には次のものがある。

坐せむ廻↓坐廻 (70) 絶エ不↓不絶 (67)

寿と命↓寿命 (69) 変フ↓変ズ (70)

西本には次のものがある。



窮↓窮(ま)ルこと(71)

不思議↓思議す(べから)ず(不)(73)

遠去ス↓遠ク去ル(63)

次に、基準六が適用できる項目は、「和訓の異同」であるが、先の「読添語の異同」の場合と同様に、两点が時代的に接近しているために基準通りの明瞭な差を見出すことはできない。但し、前掲の副詞「シマラク」だけは、春日、築島両博士に御論があつて、この語は「シバラク」の祖形であるから、これに依つて唐本は「シバラク」の西本より古いことになる。

その他の項目では、「和訓の有無」の「み聖摩」(前掲)がある。この「み」は尊敬の接頭語で、唐本は西本より和文に近い表現をしていることになる。

#### 4 その他

第四項の「副詞の呼応語」では次の基準がある。

基準七 「云ク」の呼応語は、初期点では「トイウ」「ト」を読添えるが、次久点は何も読添えないか、「ト」のみを読添える。

この基準によると、本資料の場合、用例少く、共に平安初期点であるなどの制約から一定の傾向を伺うことは困難である。但し「仮名点かヲコト点か」の項では「唐本が仮名点のところを、西本はヲコト点とする」ものが3例あつて、読添語の場合と同様に考えて唐本は西本より古いといえる。

第三項の「対句の訓法」では、次のような基準がある。

基準八 対句の上句の結びを平安初期点では終止形にするところを、永久点は中止の形にする。

この基準に照すと、「唐本が終止形にするところを、西本は中止形とする」ものも例あつて、その油は見られない点、唐本の古さ

を表わしている。前掲以外の例として次のものがある。

1 佛面猶如三淨満月の亦如三千日放光明。

(72) (西、ク)

2 智恵徳水鎮恒盈百千勝定成充滿。

(72) (西、て)ルニ)

最後の第六項の「訓法そのものの相違」とは、原漢文の構造のとらえ方からして根本的に異つている場合をさす。まず、「終止形か中止形か」の項では、「唐本が終止形のところを、西本は中止形とする」例が、その逆の場合より多く、これは「対句の訓法」に準じて考えることができる。次の「漢文の構造に合致した訓法か否か」の項は、正に原漢文の構造のとらえ方の相違に基づくもので、今まで見てきた諸項とは性格を異にしているので、ここでは除外して考へるべきものと思ふ。

#### 三 結 語

以上、小林先生の御論を中心として、更に他の根拠をも加えて両点の新古について種々考へてみた。その結果によると、両点はいずれも平安初期点である關係上、初期と中期との場合のような訓読上の明瞭な差を見出すことはできないが、相対的に見れば唐本の訓読は西本より、古いと認められる場合が多い。唐本は訓読語の成立する以前又は少くとも成立する過渡期に相当する平安極初期点を反映している(稲垣氏は平安極初期の資料とされる)のに対して、西本は訓読語の成立した平安初期点を反映していると見ることができ(昭和40・10・23)

(付) 本稿は昭和40・8・8、広大国語教育学会に発表したものを修正したものである。

(海上白衛隊第一術科学校教官)